

資料論文（翻訳）

西洋における近代スポーツおよび柔道の歴史研究

平沢信康*，濱田初幸*，田嶋靖子**

はじめに

本稿は、英国バース大学の柔道部長を務めたマイケル・カラン国際柔道研究者協会長が2008年6月に完成提出した博士論文の一部を抄訳したものである。

論文の原題と日本語訳は、以下の通りである。訳出したのは、本学の教育研究に参考となると思われる、同論文の第2章冒頭から第3節の前半までの、前号に掲載した文に先立つ部分（37頁から52頁）である。

ELITE SPORT AND EDUCATION SUPPORT SYSTEMS: A CASE STUDY OF THE TEAM BATH JUDO PROGRAMME AT THE UNIVERSITY OF BATH

Chapter II Review of Literature
Original Historical Research into Judo
A brief history of Kodokan judo
The relationship between judo and education

Michael Jeremy Callan
A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy
University of Bath
School for Health

第2章 文献レビュー

柔道と教育機関は1世紀にわたり、その関係を深めてきた。本章は、19世紀後半から今日に至るまでのスポーツと教育との関係の背景に関する歴史的考察から始まり、その関係を調べ、研究の概要と考察を述べる。歴史に関するテーマは、講道館柔道の歴史概要および柔道と教育の関係に關す

るセクションで論じる。そこから、英国の大学における柔道の歴史的発展に関する詳細な議論とスポーツとしての柔道の発展に関する考察を進める。本レビューではさらに、スポーツ奨学金の概要およびスポーツと教育に関する海外のモデルについての考察の概要を記載する。すでに述べたが、この研究では、スポーツの発展が社会的・政治的な枠組みの中で起こるものであると認識し、本文献

*鹿屋体育大学，伝統武道・スポーツ文化系

**鹿屋体育大学，プロジェクト研究員

レビューは、この問題に対する社会学的紛争理論の適用に関する議論をもって結論としている。

スポーツと教育, 19世紀から20世紀初頭の背景

近代オリンピック運動の創始者ピエール・ド・クーベルタン男爵は、1883年にラグビースクール校長のトーマス・アーノルドを訪ね、アーノルド校長は、スポーツと教育に関する男爵の見解に影響を与えた。クーベルタン男爵は若かりし頃、『トム・ブラウンの学校生活 (Tom Brown's School days)』を読み、すでに英国パブリックスクールのシステムに影響を受けていた。その著者トーマス・ヒューズは、ラグビースクールのアーノルドの教え子だった (McIntosh, 1963年)。

アーノルドは、1828年から1842年まで校長を務め、スポーツを、少年たちを管理し問題を起こさせないための手段と考えていた。当時、多くのパブリックスクールでスポーツは生徒の教育の重要な部分を占める社会的技能と資質を形成する役割をになっていた。1874年に、チャールズ・キングズリーは、Health and Education と題する著作において、どのように競技場で人格を形成するかという議論の中で、こうした見解を述べている。

「...試合は単に身体的のみならず、精神の健康をももたらすものである。すなわち競技場の中で少年たちは、書物によっては得られない徳を得ることができる。すなわち、単に勇気や忍耐強さのみならず、さらに平静さ、自制、公平さ、誇り、他人の成功をねたまず称賛すること、世間に出て行こうとするときに役立ち、それがなければ決して成功が成し遂げられない人生の『互譲の精神』のすべてである」 (Kingsley, 1874年)。

1800年代には、教育機関で多くのスポーツが開発された。19世紀中頃には、パブリックスクールの生徒に、馬や猟犬を使わずに狩猟や障害物競走を行わせ、これがクロスカントリーというスポーツに発展した。1850年に、オックスフォードのエクスターカレッジでは、大学生が人のための障害物競走を考え出した。高さ3フィート6インチの

農業用のハードルを使用し、これをレース用に140ヤードにわたり10ヤードずつ離して設置したものだ。

19世紀後半のパブリックスクールの生徒は、スポーツが生活の中心となった。ハロウスクールは、多額の費用投じて1864年には8エーカーだった競技場を1900年に146エーカーに拡大した。オックスフォードとケンブリッジでも、同じように学生は立派なスポーツ施設を利用できるようになっていた (Holt, 1992年)。施設の整備に加えて、パブリックスクールや大学が、初期世代の指導者の拠点となっていたことも認められている (Radford, 1991年)。特にクリケット、テニス、ボートといったスポーツでそのようなことがみられた。しかし、その後しばらくして20世紀初頭になると、陸上競技でマッサージ師やトレーナーが雇用されるようになった。非常に有名な例として、ケンブリッジ大学に採用され、1924年のオリンピックの100メートル走で勝利を収めたハロルド・エイブラハムスのコーチとなったサム・マッサビニが挙げられる。興味深いことに、SportscoachUK (旧 National Coaching Foundation) のスポーツコーチ優秀賞はマッサビニメダルと命名されている。

最初のクリケット大学対校戦は1827年にオックスフォードとケンブリッジの間で開催され、その2年後に両大学間で大学チーム対校ボートレースが行われるようになった。これら2つの大学は多くのスポーツに関して一般に認められているルールの制定に大きな役割を果たしている。イートン校の卒業生と2つの大学出身のボートの正選手により、最も古いボートクラブであるヘンリー・リーンダー・クラブ (Leander Club at Henley) が設立された。リーンダーは、1908年と1912年の両オリンピックのエイツで勝利を収め、今日では1992年、1996年、2000年のオリンピックチャンピオンであるイートン校卒業生のマシュー・ピンセント MBE (大英帝国勲章第5位) のホームクラブになっている。

チームスポーツは、特に全員一致しなければな

らないグループの団結と鍛錬を成し遂げるものとされていた。ホルトは、「スポーツは、まさに道徳教育の手段となった…」と述べ、さらに「スポーツは強制するべきではないが、実際にはそうなっている」と続けている (Holt, 1992年)。

大学で行われているスポーツのレベルに関しては、オックスフォード大学の学生チャールズ・バージェス・フライ Charles Burgess Fry の経歴が例として挙げられる。彼は1890年代に大学でクリケット、フットボール、陸上競技のキャプテンを務め、このいずれの競技でもイングランド代表となった。1893年に、21歳で走り幅跳びの世界記録を破り、1902年にサウサンプトンの選手としてFAカップの決勝戦で戦った。クリケットの選手として英国のキャプテンを務め、1901年までに連続イニング6回のセンチュリー達成を含め、94点のファーストクラス・センチュリーを達成した。その偉業はいまだ破られていない (Welch, 1998年)。

クーベルタン男爵は、オリンピック再開の案を練る際に英国パブリックスクールの理念を多く採り入れた。1894年6月にオリンピック再開を議論する会議が、パリ大学初期のカレッジの1つで、当時は神学部として有名だったソルボンヌで開催されたことはこれにふさわしい。こうしてすべての国際競技連盟が参加するオリンピック運動は、欧州の長い歴史をもつ大学で誕生したのである。

本レビューは、教育機関におけるスポーツの発展を考察しながら、20世紀後半へと続く。

スポーツと教育, 20世紀後半の背景

バーミンガム大学体育学部は、1956年に Britain in the World of Sport (スポーツの世界における英国) と題して英国スポーツの分析を行った。これにより、1957年に身体レクリエーション中央審議会 (Central Council of Physical Recreation: CCPR) がレディング大学副総長ジョン・ウォルフエンデンをチェアマンとして委員会を設けることになった。委員会の目的は「英国の競技, スポーツ, 野外活動の発展に影響を与える要因を調査し, これ

らの活動を地域一般の福祉の促進に十分に役立てるため, 国家機関やボランティア団体が取るべき現実的な対策を CCPR に推奨すること」であった (CCPR, 1960年)。

採用された主な推奨項目の1つが, 後にスポーツカウンシル (Sports Council) となる全国スポーツ発展審議会 (National Sports Development Council) の設立だったため, ウォルフエンデンレポートが英国のスポーツに与えた影響は, 大きなものであった。

初代スポーツ大臣は, 当時の首相ハロルド・ウィルソンにより1964年に任命され, デニス・ハウエル下院議員が就任したが, どのように任命されたかについて, ハウエルは1994年に次のように回顧している。「そこで私は家に帰り, 何をすべきか考えた。私には役人もつかなかったし, 部局もなかった。私はゼロから始めようとしており, バーミンガム大学のことを神に感謝しようと思った」 (Howell, 1994年)。

ハウエルは, 日曜日の午後にバーミンガム大学のデイヴィッド・マンロウとそのアシスタントのデニス・モリノーを自宅に招き, スポーツカウンシルをどのような形にするかを検討した。

「この国が, ではなく, スポーツ界が必要としているのは, スポーツを実践する機関であり, 学術水準が担保されるように, それは大学内のどこかに置くべきで, またその機関が利用できる研究施設もなければならぬと, 私たちは話をした」 (Howell, 1994年)。

彼は, 大学を拠点とするスポーツ審議会の他の役割についても, 次のように考えた。「契約や, スポーツにおける商業面の展開に目を配ることも可能だろうし, またスポーツ審議会の役割, CCPR の役割, 大学一般の実際の役割に関するスポーツ・アドミニストレーターの教育も支援することだろうと考えている」 (Howell, 1994年)。

ハウエルのこれらの予言的な発言は, スポーツ・アドミニストレーターの養成を行う, 容認される学術水準を有するスポーツ機関や契約による研究

施設をもつ大学のことを述べたものである。バース大学がまさにこれを生み出したこと、及びその環境に関する詳細な事例研究を文献に加える価値があるかについては、議論となるところだろう。

英国政府は、才能に恵まれたスポーツ選手の問題について、1975年の白書『スポーツとレクリエーション (Sport and Recreation)』の中で、「総合大学やその他のカレッジに、選別された若いアスリートの一般教育の必要性にも応える、スポーツに秀でたセンターを開発することの可能性について特別な研究がなされている」と記述している。

スポーツ奨学金は、英国バース大学のスポーツ部長のトム・ハドソン博士によって創設された。彼は、学生アスリートが特に時間管理と財政支援に関して困難に直面していることに気付いていた (Hudson, 1995年)。最初の英国スポーツ奨学生は、1976年のカヌーの選手マーティン・ヘッジ Martyn Hedges であった。残念なことにヘッジは、卒業後間もなく交通事故で亡くなった。バース大学のスポーツにおいて優れた貢献をした者に贈られる特別賞には、いまだに彼の名前が刻まれている。

学生アスリートを効果的に養成する環境を生み出したハドソンの先見の明は、今日に至るまでの演技競技の発展におけるバース大学の信用を築いた。この機関のケーススタディを研究することにした理由の一つは、疑いもなくこの信用によるものである。歴史的信用がなくスポーツに関してうまく組織化が行われていない異なる機関で、教育と同じようなつながりのない異なるスポーツの事例研究を検討することを選択することもできたであろう。当然これでは、他の読者はさほど興味ももてず、スポーツ開発に携わる者にとっても、あまり価値がなく、文献に加える価値もないだろう。

パルマー・レポート (1988年) には、英国のトップクラスの有望選手は、英国では教育と競技双方の必要性に応えられるシステムになっていないため、米国の機関へ行くことが奨励されたと記されている。

1987年にオクラホマバプティスト大学で学んでいた英国のアスリート、ポール・ケーシーは、「私はさらに勉強するために、また走りたいためにここに来た。英国では、どちらか1つはできるが、両方はできない」(Bale, 1991年) と述べている。この意見は、マンチェスター出身で、奨学金でジョージア大学に渡った水泳選手のポール・マッケード Paul McQuaid も支持している。「もし、英国にいたら、おそらく完全に水泳をあきらめていただろう。英国の大学には、適切なトレーニングを受けることができるほどの柔軟性がない」(Chesshyre, 1995年)、こうした考え方が1980年代から1990年代初頭にかけて広く一般に広まり、才能ある学生やアスリートが数多くアメリカに渡った。その数は1994年に450名に上った。批評家らは、この大移動を「The Brawn Drain (筋力の流出)」と称した (Chesshyre 1995年, Bale 1991年)。

スポーツ審議会は、1992年に英国におけるスポーツ科学研究の将来の方向性を探るためのレポート作成を委託した。14の研究優先事項のうち、5番目の事項が特に本論文に関連している。レポートには、「高水準のスポーツ実績を開発するための動機づけとなる理想的な環境については、あまりよく知られておらず、このギャップが改善されなければならない」と記載されている (Reilly, 1992年)。

アトランタ・オリンピックが終わった1996年、英国オリンピック協会のテクニカル・ディレクター、ケビン・ヒッキー Kevin Hickey は、次のように述べている。

「現在私たちにできていないことは、より体系的な方法で能力を識別すること、統合的なプログラムの中でライフスタイルを支援すること、必要な場合にいつでもすべてのスポーツ・サービスが利用できる環境をフルタイムのアスリートに提供することである」(Hickey 1997年)。

能力開発に関するこの問題については、ロバート Roberts (1996年) が「Pathways of Success (成功の道)」、ロディ Roddy (1999年) が「Pipelines of

Talent (才能のパイプライン)」と、それぞれ述べている。英国教育・雇用省 (Department for Education and Employment) が支援する1つのイニシアティブでは、この問題をいくらかでも是正する道を探っている。青少年スポーツトラスト (The Youth Sport Trust) は、英国の子どもを対象とするスポーツ対策を改善するため1994年に設立された慈善団体であり、これを目的として「スポーツ・カレッジ (Sports Colleges)」として知られる認証マーク制度を創設した (Campbell, 1996年)。

1996年の英国スポーツ審議会のロドニー・ウォーカー委員長は、能力の識別と開発に係わる問題について非常に積極的であった。「最終的にスポーツで成功することに結び付く能力をもっている可能性のある若者を識別するためばかりでなく、私はスポーツが若者の人格開発に重要な役割を果たしているとも考えているため、スポーツは教育システムの主要部をなすべきである」 (Walker, 1996年)、ロドニーはこのように意見を表明することで、アーノルドが言う筋肉的キリスト教に関する信仰とオーストラリアのスポーツシステムに係わることが多い能力の識別に関する現代の概念との橋渡しをしている。

過去10年間に最も影響力がある文書の1つは、1995年7月にジョン・メージャー首相が着手した保守政権のスポーツ方針声明「スポーツ：レイジング・ザ・ゲーム (Sport: Raising the Game)」である。レイジング・ザ・ゲームには新しいイニシアティブが数多く盛り込まれ、学校スポーツと高い競技レベルのスポーツ双方を目指している (Department of National Heritage, 1995年)。

明らかになったイニシアティブで最も注目度の高かったものの1つは、イギリス・スポーツアカデミー (British Academy of Sport) に関する提案である。首相はこのプロジェクトに宝くじの基金から1億ポンドを支出することを公約した。2つの重要な点に留意する必要がある。第1に、国営宝くじ基金の公約は、首相府の権限に含まれていないということである。この権限があるのはホー

ム・カントリー・スポーツカウンシルズ (Home Country Sports Councils) である。第2に、この1億ポンドという金額は、アカデミーの設立場所、その形式、収容される施設が決定される前から使用されていた。

1996年にレジャー産業研究センター (Leisure Industries Research Centre) が英国トップクラスのスポーツ選手に関する調査を実施した。この研究はイギリス・スポーツアカデミーのシェフィールドの入札に関する実現可能性調査の一環として行われた。結果は、84%のアスリートが、トップクラスのアスリートに改善した教育的取決めを提供する制度について検討することを希望していた。この調査で質問に答えた選手の実に65%が、高等教育を受ける資格を得るために現在勉強中であるか、すでに取得していた。この研究は、「スポーツ奨学金制度の拡大は、判明している多くの問題を解決することになるだろう……」 (Gratton, 1996年) と結論づけている。

レイジング・ザ・ゲームが開始されるわずか1ヵ月前に、タイムズ紙 (O'Leary, 1995年6月7日) に、「公的支出に制約があることや実務上の問題から、国民文化財省は計画の規模を縮小せざるをえない」という記事が掲載された。これは特に国立のスポーツ・カレッジ設立計画に関するものであった。

もう1つ大きく注目されているイニシアティブは、総合大学やカレッジでより進んだ高等教育を受けるために利用できるスポーツ奨学金の数を増やすという提案である。

この提案を受けて、スポーツ大臣のイアン・スプロート Iain Sproat 下院議員は、スポーツ奨学金の問題を検討するため、委員会を設置した。委員長は、ロジャー・バニスター卿が務め、通称バニスター委員会として知られた (Bannister, 1996年)。バース大学の現スポーツ部長が、バニスター委員会の委員を務め、学生アスリートの対策に関する現状について、政府の審査を行った。これについては、スポーツ奨学金のセクションで詳細を扱っ

ている。ロジャー・バニスターは、史上初めて3分台で1マイルを走った選手である。彼は、まだオックスフォードの学部学生だったときに、大学のトラックでこれを成し遂げたのである。

オックスフォード大学は、大学における柔道の発展にも大きな影響力をもち、1926年以前から続く柔道部を有することを誇りとしている。オックスフォードの柔道部や他の大学の柔道部について詳細を論じる前に、本論文では、まず柔道というスポーツの背景について概要を述べる。

柔道の起源に関する歴史研究

本論文の理論的要旨を理解していただくための手助けとして、文献レビューには、4つのセクション、すなわち講道館柔道の歴史概要、柔道と教育の関係、英国の大学環境における柔道の発展、「スポーツとしての柔道」の発展を以下に設ける。これらのセクションは起源に関する歴史的研究が大きな部分を占め、事例研究の内容に対する背景を記述する。

講道館柔道の歴史概要

マツモト Matsumoto とブルース Brousse (1999年) は、柔道について、優れた身体能力と多大な精神修養の双方が要求される素晴らしくダイナミックな格闘技であると述べている。柔道は、19世紀に、日本が大きな変化を経験した時代に育った若い教育者が、古来の武術のスタイルを取り入れ、統合したものである。明治維新により開国し、初めて海外の影響を受け、侍は伝統的な刀を持つことが許されなくなっていた (Callan, 2000年)。

柔道の創始者、嘉納治五郎の生涯については、2005年の Murata, 1955年の講道館, 2006年の Hoare, 1996年の Matsumoto など、多くの著者により記録されている。

嘉納治五郎は、1860年に現在の神戸市内の裕福な酒造家の家に生まれた。祖父は詩人であり、漢学者でもあった。彼は語学の才能があったが、体がやや小さく虚弱な少年だった。母の死後、1870

年に父とともに東京に移った。彼は儒学の学校に通いながら、英語の個人レッスンも受けさせられた。英語の教師であった箕作秋坪は、教育改革に興味をもつ学者であった。1875年に開成学校に通う。1877年に東京大学 (後に東京帝国大学) に入学し、政治、哲学、経済を学んだ。

嘉納は、人気がなくなっていた古来の武術である柔術を学ぶことを切望していた。天神真楊流の師範であった福田八之助を捜し出し、福田の他界後に起倒流へ転ずるまで、師のもとで3年間学んだ。

1882年に卒業すると、上流階級の私学、学習院で政治・経済の講師となった。さらに、自らの私学、嘉納塾を開き、門下生の人格形成を目指した。この年は、講道館として知られる彼自身の道場を創設した年でもあった。講道館は、永昌寺 (仏寺) の小さな8畳間に設けられた (Murata, 2005年)。彼はさまざまな流派を取り入れて教え、これを柔道への融合と呼んだ。自分が教えるものを古来の武術と区別するために、柔道という言葉を選んだ。Matsumoto と Brousse (1999年) は2つの漢字からなる judo という言葉について、ju は「柔らかさ」であり、do は「道」を意味すると説明している。すなわち「柔の道」という意味である。

多くの教育理念が盛り込まれ、その目指すところは精神と身体のエネルギーを最も効果的に使うことであった。柔道は競技スポーツとして、また生き方として発展した。それは教育に対する嘉納の考えを身体的に表現したものであった。

講道館の門下生は、世界中を旅して柔道の教えを広めるよう奨励された。1906年に、英国人の E.C.D. ローリングスがケンブリッジ大学で欧州最初のクラブを設立した。1907年にシアトルで米国最初のクラブが設立された。嘉納の弟子、山下義韶は熱烈な愛好家であったセオドア・ルーズベルト大統領に教授した。後に英国では、小泉軍治により武道会が設立された。小泉は、英国と欧州双方における柔道の発展にとって重要な人物であった。

1909年に、日本は、国際オリンピック委員会 (IOC) の創立者ピエール・ド・クーベルタン男爵の招聘を受け、IOC に加盟した。嘉納治五郎が日本代表に選ばれ、アジア初の IOC 委員となった。

その後の10年間で柔道は世界中に広まった。戦争で開催が中止されなければ、柔道は1940年の東京オリンピックの競技種目になっていたであろう。戦後は数多くの主要組織が設立された。1948年7月24日にロンドンのインペリアル・カレッジで開催された総会においてジョン・バーンズ John Barnes を初代チェアマンとする英国柔道連盟 (British Judo Association), 1948年7月26日、同じくロンドンのインペリアル・カレッジで英国のトレバー・レゲットを短期のチェアマンとするヨーロッパ柔道連盟 (European Judo Union), 1951年7月12日にイタリアの Aldo Torti を初代プレジデントとして、ロンドン、ソーホーの Choy's Chinese Restaurant で国際柔道連盟 (International Judo Federation) が設立された (Bowen, 1999年)。

柔道と教育の関係

教育の事、天下にこれより偉なるはなし。

一人の徳教、広く万人に加わり、

一世の化育、遠く百世に及ぶ。

(嘉納治五郎師範)

Callan (2000年) により、嘉納が、教育には3つのこと、すなわち知識の習得、道徳の教授、身体トレーニングがあると考えていたことが記されている。柔道は身体的、知的、道徳的教育の優れたシステムであり、学生に倫理規範、生活のあり方、生き方を教えるものであるとしている Matsumoto と Brousse (1999年) もこれを支持している。柔道家の道徳規範はフランス柔道連盟 (French Judo Federation) により促進されている。同連盟は、礼儀、勇気、誠実、克己、名誉、謙虚、友情、尊敬を育成している。Matsumoto と Konno (2005年) は、柔道を学ぶ者は他の者より

幸福であることを実証した。

Matsumoto と Brousse (1999年) による以下の記述は、チームバース柔道プログラム (Team Bath Judo Programme) がジュニアプログラムを立ち上げた2004年に、保護者に支援を求めるためのマーケティング資料に引用したものある。

「柔道を学ぶ学生は、思いやりをもつことを学び、生活の他の場面でも通用する活動意欲が向上します。また、慎ましく公明正大であることを学び、誠実さ、勇気、責任を尊重する姿勢が養われます。尊大であることは許されず、感情のコントロールや勤勉さを養う身体的、精神的に厳しいトレーニングの中で忍耐強さを学び、敬意と礼節をもって互いに挨拶し、指導者には尊敬と称賛の意を示します。つまり世界の良識ある市民となるために必要な社会的礼儀作法について多くを学ぶのです。」

嘉納は、高等師範学校長という職務を通じて、教育者として名声を博した。柔道を自分の教育観を身体的に表明させるものと考えていた彼は、柔道の基本原則を2つの理念にまとめた。心身の力を最大限に活かす「精力善用」と互いを敬い感謝する「自他共栄」の理念である。

1934年6月5日に、嘉納はギリシャのアテネにおける Parnassus Society での講演の中で体育の目的を次のように述べている。「私は、体育の目的は少なくとも4つあるべきだと考えています。すなわち、健康、強さ、実用性、精神修養であり、これらには、知的、道徳的、美学的側面があります。これについては誰も反論しないでしょうが、誰も、体育の専門家でさえ、この4つそれぞれの重要性を研究していないという事実、特に注意していただきたいのです。多くの体育推奨者は力と能力をあまり注いでいないのでしょうか。体育の教師は、内部器官や体のバランスのよい発達以外にはほとんど注意を払っていないのでしょうか。体育の目的が明確に定められておらず、この4つの相互関係が真剣に研究されていないため、人々は必然的にこの誤りに陥ってしまうのです。精力

善用の理念がまだ全世界に認識されておらず、この理念を踏まえてこの問題を研究する者がほとんどいないためにこうしたことが起こるのです。」

そして彼は、精力善用の理念を道徳や知識の修養に取り入れることを論じている。「この体育の4つの点に関して述べたことと同様に、知的修養と道徳的修養との相互関係とこれら2つと身体的修養との相互関係は真剣に研究すべき問題なのです。しかし、一般の人々のみならず教育者でさえこれには無関心です。知的修養、厳密に言うと知識の習得ですが、これと知的能力の育成には相関性があるため、個別に扱うことができません。ですが論理的思考力と判断力の育成と単なる知識の習得は、違った角度からみることができ、知的修養の中にあるはずのそれぞれの分野を特に研究すべきです。」

講道館の創立から100年後の1982年にグッジャー Goodger が、戦後の英国における中核的な柔道の修養を象徴する道徳規範の特性について次のように著している。「緻密で、力強く絶対的な道徳規則の特性とその修養の教育上のかかわりにあがちな厳しい規制との間にある潜在的な関係を考えるのは興味深い。」

Matsumoto と Brousse (1999年) は、嘉納の教育に対する3つの柱となるアプローチを特定しているデイヴィッド・ウォーターハウス David Waterhouse *による嘉納の伝記について言及している。この3つの柱とは、知識の習得、道徳の教授、体育による身体トレーニングである。この「3つの教育理念」または「三育主義」は、英国ビクトリア朝時代の哲学者であり、政治理論学者でもあったハーバート・スペンサーの理論に基づくものである。スペンサーは、社会ダーウィニズムの提唱者として知られ、「適者生存 (Survival of the Fittest)」という言葉初めて作った。その影響は1861年のスペンサーの著書『スペンサーの教育論 (Education, Intellectual, Moral and Physical)』のタイトルからみることができる。

ウォーターハウスは、筆者との個人的なやりと

り (2007年) の中で、柔道の2つの基本理念とハーバート・スペンサーの著作との関連について次のように述べている。

「嘉納の2つの理念、精力善用と自他共栄は、長い時間を経て、彼の晩年に最終的な形に至った。1889年5月11日の講演の中で、嘉納は天神真楊流と起倒流で受けた身体トレーニングを概説し、体育、知育、徳育、すなわちそれぞれは、スペンサーの身体的、知的、道徳的教育であるが、これらを同時に実現するために柔術を利用することが可能だと考えた」と述べた。嘉納が受けたスペンサーの影響については、嘉納先生伝記編纂会編『嘉納治五郎』講道館 (1964年出版; 1977年再版) を主に参照した。

興味深いことに、ハーバート・スペンサーは1833年に教育のため叔父にバースに送られた。彼の最初の著書“Crystallization”は、1836年1月に Bath and West of England Magazine に掲載された。彼の自伝に、Bath Union と The Bath Magazine についての記載がある。

ジョージ・サンソムの The Western World and Japan (London, 1950年) の中には、日本における J.S. ミルとハーバート・スペンサーの影響に関する概説が記載されている。

スペンサーの著書は19世紀後半にいくつか翻訳されたが、嘉納は特に“Essays on Education and Kindred Subjects” (1861年に最初の著作集が出版された) などは、英語で読むことができたろう。「Education: Intellectual, Moral, and Physical」と題するこの著作集の第1部は、日本語で三育主義「3つの教育理念」となり、明治の知識人の間でよく知られるようになった。嘉納はこれに精通しており、間違いなくスペンサーを英語で読むことができたはずだが、彼の著作集 (『嘉納治五郎大系』全14巻, 1987年-1988年) にスペンサーに関する記述は1カ所のみしかないようだ (Waterhouse, 2007年)。

スペンサーの影響は、嘉納が教育の重要性を主張したこと、柔道の道徳的側面を強調したこと、

講道館柔道に女子を認めたことにみられる（スペンサーは女性の体育を最初に奨励したわけではないが、彼の論文「体育」（1861年）では積極的にこの問題を論じている）。

嘉納は、「健康な身体は生きるために必要な状態のみならず、知的活動や精神活動の基盤となるものでもある。たとえどのように健康な人であろうと、その人が社会のために役立たなければ、その存在はむなし」（1932年）と記している。特に、柔道の知的、道徳的、身体的側面について1932年に著書「柔道の教育への貢献」の中で次のように述べている。

「柔道は心と体の研究と修養であると同時に、人の生活や諸事に関する規則の研究と修養でもある。攻めと守りに関するさまざまな技を徹底的に研究することにより、私は万事がすべてに通じる1つの原則を取り入れるかどうかによると確信するようになった。それはつまり『対象が何であれ、その目的のために心と体を最高に、最大限に活かすことで最善が達成される』ということである。この原則を攻めと守りの技に取り入れることが柔術となるように、同じ原則を身体的、精神的、道徳的修養と同時に生活や仕事のあり方にも取り入れることが、これらの学習やトレーニングとなる。」

1919年に東京帝国大学の客員講師を務めていたとき、嘉納はジョン・デューイに会った。デューイは、アメリカの教育制度の開発において主導的な役割を果たしていた。嘉納はデューイを講道館に連れて行き、畳の上で自分の考えを説明した。デューイは嘉納が開発した制度を称賛した。後の1929年にデューイは、著書 *Characters and Events of The Work of Herbert Spencer* と題する章で、進化論にはヨーロッパ哲学の長い歴史があると指摘している（Holmes, 1994年）。

柔道と教育に関する本要約レビューの最後に、「柔道の教育への貢献」と題する嘉納のもう1つの有名なスピーチを記載する。このスピーチは、嘉納がIOC委員として訪問した1932年ロサンゼルスオリンピックで行われた。彼は知識の習得と

いう観点から教育について語った。「有益な知識の習得に加え、記憶力、注意力、観察力、判断力、論理的思考力、想像力などの知的能力を高める努力をしなければなりません。しかし、これは無計画に行うのではなく、心理学的法則に則って行わなければなりません。そうすることにより、こうした能力相互の関係がうまく調和したものになります。『精力善用』の理念に忠実に従うのが柔道であり、そうすることによってのみ、知識と知的能力を合理的に高めるという目的を達成することができるのです。」

訳注

※ウォーターハウス David Waterhouse = トロント大学名誉教授。優れた日本近世美術史の研究者であると同時に、柔道の研究家でもある。仏教や、古代日本の音楽や演劇にも詳しい。

リファレンス

- Bale J., 1991. *The Brawn Drain – Foreign student athletes in American Universities*. University of Illinois Press. Chicago USA
- Bannister, R., 1996. *Raising the game: Report of the working group on university sports scholarships*. Department of National Heritage
- Bannister, R., 1996. *University Sports Scholarships and their funding*. *Proceedings of Sports Colloquium: Sport & Higher Education into the 21st Century.*, 111. University of Bath.
- Bowen, D., 1999. *Origins of the British Judo Association, the European Judo Union, and the international Judo Federation*. *Journal of Asian Martial Arts* Volume 8 Number 3, 43–53.
- Callan, M., 2000. *More than just a sport*. *Games of the XXVII Olympiad Official Sport Program – Judo*, pp. 12–14
- Campbell, S., 1996. *Maintained schools to apply for “sports college” status*. *Sports Industry*, No. 128 Nov/Dec, 5.
- Central Council of Physical Recreation & National Coaching Foundation, 1996.
- Chesshyre, T., 1995. *Time to halt transatlantic ‘brawn drain’*. *Independent*, 7 February, 30.
- Department of National Heritage., 1995. *Sport Raising the Game*.
- Goodger, J., 1982. *Judo Players as a Gnostic Sect*, Originally appeared in *Religion*, 12 (1982), 333–344.
- Gratton, C., 1998. *The economic impact of modern sport*. *Sport in Society*. 1 (1), May, 101–117.
- Hickey, K., 1997. *BOA Support Services*. *Coaching Focus*, No.34 Spring, 20–21. National Coaching Foundation
- Hoare, S., 2006. *History of Judo*. Unpublished paper presented to the European Judo Union Level 4 Programme, University of Bath, 23rd July.
- Holmes, B., 1994. *HERBERT SPENCER (1820– 1903)*. This document was originally published in *PROSPECTS: the quarterly review of comparative education* (Paris UNESCO: International Bureau of Education): vol.24, no.3/4, 1994, p. 533–54.
- Holt, R., 1992. *Sport and the British, A Modern History*. Oxford.
- Howell, D., 1994. *The development of British Sport and the place of Universities*. British University and Colleges Physical Education Association (BUCPEA) 1994 Conference Report.
- Hudson, T., 1995. *The Sports Scholarship Scheme at the University of Bath. A systematic approach to meeting the needs of the elite academic athlete.. PhD Thesis*. University of Surrey.
- Kano, J., 1932. *Speech given at the University of Southern California (USC) in Los Angeles on the occasion of 11th Olympiad, 1932*.
- Kano, J., 1932. *The contribution of judo to education*. Speech made at the 1932 Olympic Games, Los Angeles.
- Kingsley, C., 1874. *Health and Education*. p. 86, London
- Kodokan, 1955. *Illustrated Kodokan Judo*. Kodansha, Tokyo.
- Matsumoto, D., 1996. *Introduction to Kodokan Judo: History and philosophy*. Tokyo, Japan: Hon no Tomo Sha.
- Matsumoto, D. & Brousse, M., 1999. *Judo, a sport and a way of life*. Korea: International Judo Federation
- Matsumoto, D., & Konno, J., 2005. *The relationship between adolescents’ participation in judo, quality of life, and life satisfaction*. *武道学研究 (Research Journal of Budo)*, 38(1), 13–26.
- McIntosh, P., 1963. *Sport and Society*. Macmillan.
- O’Leary, J., 1995. *Elite colleges dropped from sports revival plan*. *The Times*, 7 June, 10.
- Palmer, C., 1988. *Amateur status and participation in sport.*, 49 Chapter 10. *Sports scholarships*. CCPR

Radford, P. et al., 1991. Coaching Matters, a review of coaching and coach education in the UK. Sports Council.

Reilly, T., 1992. Strategic directions for sports science research in the United Kingdom. Sports Council.

Roberts, A. D., 1996. Sport and Higher Education – A case study. The University of Canberra – Centre for Sports Studies. Proceedings of Sports Colloquium: Sport & Higher Education into the 21st Century., 69. University of Bath.

Roberts, A. D., 1996. Sport in Australia, “Down under comes out on top”. Proceedings of Sports Colloquium: Sport & Higher Education into the 21st Century., 84. University of Bath.

Roberts, A.D., 1996. The Australian College of Sports Education, A model partnership in Sports Education. Proceedings of Sports Colloquium: Sport & Higher Education into the 21st Century, 74. University of Bath.

Roddy, G., 1999. Personal Communication.

Sansom, G. B., 1950, The Western World and Japan. A Study in the Interaction of European and Asiatic Cultures. Charles E. Tuttle Company, Tokyo

Spencer, H., 1861. Education: Intellectual, Moral and Physical. D. Appleton and Company, New York.

Walker, R., 1996. Sport talk. Sport – the magazine of the Sports Council. 4

Waterhouse, D., 2007. Personal Communication.

Welch, D., 1998. The Daily Telegraph Century of Sport. Macmillan p.11